

労使で助け合い営業再開 復興支援の輪を広げる

(宮城地本)

2012年1月1日 復興支援の輪を広げていきたい

東日本大震災から九ヵ月を経過する中、大半の方が仕事に復帰し、仮設住宅やアパートなどで生活再建と復興へ向けて取り組んできました。沿岸部で家が跡形もなく流され母親を含む家族三人を亡くしたKM仙台支部の鈴木一郎組合員は、慣れない仮設住宅で冬を過ごすことや将来のことを考えると不安で眠れない夜もあるそうです。

ただ過去に引き込まれないことが一番大事なことであり、心に「希望の光を」当て、苦しいときに支えてくれた仲間の「絆」をより大切にしていると語っています。

また、社屋が全快となりタクシー十一台と組合員の自家用車二十四台が全孫子、大きな被害を受けた多賀城復興支部は、一時、営業停止が余儀なくされ、再開後も多くの組合員が所定の勤務に就けず厳しい状況続く中、組合の団結で降板の変更や縮小などを組合側から提案し、「お互い助け合って生きる」精神で立ち上がってきました。営業所は、十二月に入りようやく洗車機が設置されるなど、設備関係を中心に順次回復には向かっていますが、課題も多く現在は、情勢を考慮し、流失した営業者の補充についても協議を進めています。宮城地本としてもこれらを踏まえ、組合事務所設置の早期実現などを含めた今後、さらなる復興支援の輪を広げていきたいと考えています。